

---

# The Tune Of Stars

九条玖々

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The Tune Of Stars

### 【Zコード】

Z2676Z

### 【作者名】

九条玖々

### 【あらすじ】

喫茶店でアルバイトをし、一般的な大学生と左程変わらぬ生活を送っていた僕の人生をあらぬ方向へ分岐させたのは、おそらく「しがみガードして」といきなり言つてのけたゴスロリを着た少女との出会いであろう。

## 一章 幻影の城 『しゃがみガード』

時計は午後八時 僕がアルバイトしている喫茶店の閉店時間を指していた。

普段は店長も閉店時間までいるのだが、風邪を引いて寝込んだらしく、復帰するまで店をまかされていた。

正直、パートかアルバイトをもう一人くらい雇つてほしい。客は窓際の奥の席に一人、頬んだコーヒーも飲まず、ただ外を眺めているだけの少女、一人だけであった。

「お客様、閉店時間ですので、お会計をお願いしたいのですが……」見た目は高校生くらいだろうか。黒髪のショートヘアを指先で弄りながら、眠そうに外を眺めている。その目はカラコンでも入れているのだろうか、赤い色をしていた。正直言つて凄く美人である。少女の服装は黒を基調としたゴスロリで、それがまた少女の美貌を上手く引き立てている。

そんな絶世の美少女だが、どうやら僕のお願いは無視されたらしい。

「これでは店を閉められない。

「あのー……お客様、聞いておられますか?」

……無反応。

無錢飲食ではなさそつだが、このまま居座られても困る。いつも警察に頼つてしまおうか……。

そんなことを思つていると、少女は急にこちらに目を合わせた。そして彼女の言つた言葉は、

「しゃがみガードして」

実際に異常だつた。

だが、そのレスポンスをする暇もなく彼女に足を払われ、僕は

呆気なくうつ伏せに倒された。

床に直撃した胸部に痛みが走る。

「いきなり、何を……！？」

……立てない。相当な力で頭を押さえ付けられているらしい。——  
体あの華奢な腕の何処にそんな力が？

……！？

直後、窓硝子が壮大に割れた音がし、その破片が僕の見える範囲にまで飛び散ってきた。

日中に暖められた、温い風が店内に吹き込む。

どうなっているんだ！？ こんなこと……ありえないだろ！！

少女の手から解放され立ち上ると、目の前には真夏だというのに黒いトレーナーに身を包んだ銀髪の白人が、不気味な笑みを浮かべ立っていた。

「何だよお前！！ 警察……を

急に意識が薄れ、視界が真っ暗になった。

## 一章 幻影の城 『時給千円』

目覚めると、細長い蛍光灯の明かりがまづ目に入った。僕は片手でその光を遮りながら起き上がる。ソファーの上で眠っていた所為か、体が痛い。

目の前にはテーブル、その先には両脇を本棚に挟まれた形で、古びたブラウン管のテレビが置かれていて、その横には出入口と思われるドアがあつた。

……全く見憶えがない部屋に僕はある。

「お、ようやくお目覚めか」

その声に反応して後ろを振り返ると、綺麗な赤色をしたセミロングの髪が印象的な、スース姿の女の人がコーヒーを持ってきた。「僕の分のコーヒーを持ってきたことは、僕が起きたことを予め知っていたのではないのですか?」

彼女は一言それを肯定し、僕の前にコーヒーを置いた。

「自己紹介がまだだつたな」

彼女は僕に名刺を手渡した。

それには星屑海屑子と書かれていた。逆にそれ以外は何も書かれていなかつた。真っ白である。

「ゴミ子と呼んでくれ」

……

とりあえず、僕も名乗つた方がいいか。

「僕は

「君の名前はどうに知つている」

ゴミ子さんはそう言つて、僕の言葉を遮つた。

「……予知能力でも持つてているのですか?」

僕がそう言つと、案の定ゴミ子さんは大笑いした。

「傑作だなあ、おい。私にそんな大そうな能力があるわけないだろ

う?」

確かにそれも一理あるわけだが、何もそこまで笑わなくても……。

「大笑いしたことだし、そろそろ本題に入らうか。さて、君は何故ここにいると思う?」

何故つて……。

アルバイト先の喫茶店で閉店処理を……。

あ……。

「すいません! 今すぐバイト先に戻らないと……」

何が起こったのかイマイチ理解できないが、店の鍵を閉めていないのは確かだ。これで泥棒にでも入られたら、いくらなんでも不味すぎる。

「心配はいらんよ。戸締りはした。硝子も元に戻しておいた。それにもうあれから三日も経っている」

硝子?

三日?

何がどうなつてているんだ?

何で彼女が戸締りをしているんだ?

今にも頭がパンクしそうだ……。

「とりあえず、落ち付け。そして、よく思い出してみる」

とりあえず深呼吸を数回し、心を落ち着かせる。

すると不思議なことに、すう一つと記憶が引き出された。

そこには「スローリを着た少女と黒いトレンチコートを纏つた銀髪

の男が対峙していた。

「これは……?」

「君は残念なことに、『魔術師』の戦争に巻き込まれたのだよ

魔術師?

それはあまりにも聞きなれていて、聞きなれない言葉だった。

「あの男は何処のどいつかは知らないが、彼女の方は知っている。むしろ、君をここまで連れてきたのは彼女だ」

あの少女が……僕を?

「……あの少女は?」

「彼女は蛙川憂子だ。今はいなが、直にもう一度顔を合わせられるだろ?」「う

今はいないうことは、あの少女 蛙川憂子はここに出入りしているらしい。それも頻繁に。

「……あの、ともかくアルバイト先の店長に謝りに行かないと……」

理由はどうあれ、三日も無断欠勤しているんだ。いくら店長が温厚な人だからと言つても、流石に怒つていはないわけがない。

「ああ、その辺も大丈夫だ。とっくに君のことなんざ忘れているさ。正確には 忘れてもらつたと言つた方がいいか

胸ポケットから取り出したタバコを咥え、「ミコさんはそれに火を点けた。

「せつかくだから、うちで働いてもらひにしたのさ。ちょうど人手も足らなかつたとこだ」

「そんな勝手な」

理不尽にもほどがある。

「君がここで働いてくれるのなら、それなりの報酬は出すつもりだ」  
この人たちに深く関わるのは、止めた方がいいのは確かだ。  
いつも場合は、逃げるのが得策だな。

「……考えて下さい」

僕はそれを口実にし、この部屋から出た。  
ドアを挟んだすぐ先は螺旋階段になつていて、それを降りると、  
出口はすぐそこだった。

「ここは……」

外に出ると、そこは見憶えのある いや、見慣れた場所だった。  
どうやら、駅前の商店街から少し離れたところに建つ、古びたビルに僕は今までいたらしい。

入口には『星屑海』と書かれた表札があった。

それにしても、ミコさんは、よくこんなところに住めるな……。  
ともかく、他にアルバイトを探して、早く普通の生活に戻らなければ……。

僕はアルバイトの求人情報誌を入手する為、駅前にある「コンビニへ行く為に、商店街の方向へ歩き始める。

「」、御崎町は半分が水田と畑である為、風景の殆どはそれである。

唯一、店舗が立ち並ぶ商店街も人は疎らで、近年言われている過疎化減少が覗える。

商店街を抜ければ町唯一の駅があり、その向かい側にコンビニがある。

商店街の店の殆どは、日中にも関わらずシャッターを下ろしている。不景気で経営が困難になったのか、単に老いて経営を続けられなくなつたのかは、僕の知るところではないが、少し寂しさを覚えた。

僕はそんな商店街を足早に抜け、駅前のコンビニに入った。  
えつと、情報誌は……。

僕は無料の情報誌が置いてあるコーナーからアルバイトの求人情報誌を探す。

だが、置いてあるのは賃貸情報誌のみで、残念ながらアルバイトの求人情報誌は一冊もなかつた。

思えば、あの喫茶店もやつとの思いで探したんだつけ？

こんな町で独り暮らしを始めたのが悔やまれる。

「あ…………」

不意に溜息が漏れる。

このままでは光熱費や家賃はあるが、食費すらまともに払えない。やはり、「」さんのところで働く以外、手はないのか……。僕は仕方なく、「」さんのビルへ戻ることにした。

「お帰り。案外早かつたんだな」

「」さんは自分のデスクで新聞を広げていた。

「」に戻ってきたということは、うちで働いてくれるということだろ？」

「」さんは新聞を畳み、契約書を僕の前まで持ってきた。

……千円ももらえるのか！？

確かに契約書には時給千円と書かれていた。

その瞬間、僕の意志は固まった。

「ここで、働くかせて下さい」

僕のその言葉と同時に、ドアが開いた。

「……おはよう」

昨日の少女がここに入ってきた。

「ああ、おはよう憂子。そこにいる青年が、今日からここで働くことになった。色々と教えてやつてくれ」

ビシッと親指を立て、雇い主は僕の教育を丸投げした。

「ああ、まだいたのね。私のことは呼び捨てでいいわ。私の方が年下だし」

今さつき僕を認識したような口調で、少女　憂子は僕にそう言った。

「……ようじく」

「では、挨拶も済んだし、早速仕事をしてもらおうか」  
パンパンと一回手を叩き、「ミミ子さんがそう言った。

「初仕事の内容は、とある廃ビルの内部調査だ。迅速に済ましてきてもらいたい」

根城にしているホームレスの実態調査でもするのだらうか？

ともかく、それくらいなら僕にもできそうだ。

「それと、これを廃ビルの中央に置いてってくれ」

「ミミ子さんは僕に透明のビー玉を手渡した。

「ビー玉？」

ビー玉なんて何に使うのだらうか？

「それは保険だ。それと、こつちは君の護身用」

もう一つ、彼女は僕に柄に綺麗な蝶の装飾がなされたナイフを僕に手渡した。

それにしても、護身用にナイフだなんて、物騒だな。

そう思いながら、僕はナイフを懐にしまう。

「……行くわよ」

優子と共に僕は、『ナナ』とのペルを後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2676n/>

---

The Tune Of Stars

2010年10月8日14時33分発行